

日本における財政学の導入・構築と田尻稲次郎

瀬戸口 龍一
(専修大学史資料課)

はじめに

専修大学では平成二三年一月二日から平成二四年一月九日にかけて、鹿児島県歴史資料センター黎明館において「日本の財政学を築いた薩摩藩士〜専修大学創立者・田尻稲次郎の生涯〜」(以後、田尻展と略)と題する企画展示を同館と合同で開催した。三年前の平成二一年に桑名市博物館・専修大学・一橋大学の共同で行った企画展「駒井重格の軌跡〜専修大学の創立者、一橋の名校長〜」に続く専修大学創立者展の第二回目の展示である。田尻展の「ごあいさつ」を引用すると、その開催主旨は次の通りとなる。

幕末から近代にかけて薩摩藩は政治・経済・教育・司法・軍事・文化といった様々な分野において数多くの優秀な人材を輩出しました。今回ご紹介する薩摩藩士・田尻稲次郎もその一人と
言ってよいでしょう。

田尻稲次郎の最大の功績は、教育者として、そして官僚として日本に初めて「財政学」を導入・定着させたことです。明治維新

を経て、欧米列強と肩を並べるべく近代的な国家づくりを始めた時の政府にとつて司法の整備とともに重要視されたのが、国家財政の確立でした。田尻稲次郎はこの時期の日本が抱え込んでいた難題の一つ、財政問題に生涯をかけて取り組んだ人物でした。

では田尻が築いた「財政学」とはどのような学問なのでしょうか。辞書風に言うと「近代国家の経済活動を、予算・経費・租税・公債といった財務行政の側面において研究する」学問ということになります。田尻は、日本に初めてフランス財政学を紹介するとともに、大蔵官僚として同じ薩摩藩出身の政治家・松方正義を補佐し、明治政府の財政・金融制度の確立に尽力しました。自らの理論を机上の学問とせず、実行力のともなった希有な人物でもあったのです。

教育者としても明治一三年に専修大学の前身である専修学校を留学時の仲間たちとともに創立したほか、多くの学校で教壇に立ち、後に大蔵官僚や経済学者として活躍する人材を育成しました。経済学の分野では日本で初めての博士号も取得しています。

今回、黎明館と専修大学では田尻ゆかりの地である鹿児島において、大蔵官僚、教育者、政治家と多彩な顔を持つ田尻という日本を代表する財政学者の生涯を様々な角度から紹介する特別展を企画しました。この展示を通してご来館の皆様「財政学」に一生を捧げた田尻の情熱を知っていただければ幸いです。

これが田尻展の趣旨であるが、少し補足したい。専修大学の創立者は四人いるが、そのなかで駒井重格に続いて田尻稲次郎を取り上げた理由としては次のような理由からである。

専修大学は明治一三年（一八八〇）に日本で初めて経済学を、私学で初めて法学を組織的に、かつ日本語で教授する高等教育機関としてスタートした。つまり専修大学は法律専門学校であり、経済専門学校として誕生したわけであるが、法律学校という視点から見ると、専修大学の誕生後、ほぼ時を同じくして、現在の法政大学が設立される。その後も明治大学・早稲田大学・中央大学・日本大学などが次々と誕生するほど、明治一〇年代から二〇年代は東京だけでなく関西にも数多くの法律専門学校が設立された時期であった。その理由としては、この時期の自由民権運動の高まりのほか、憲法制定、議会設立が声高に叫ばれ、法の整備が必要となり、それに役立つ人材が必要とされたことなどが挙げられる。

しかし経済専門学校という視点から見ると、東京大学に経済学科が誕生するのは明治四一年（経済学部は大正八年（一九一九）、京

都大学経済学部も同年に設置）のことであった。また慶応義塾大学でも理財科が置かれたのは明治二三年であることを考えると、専修大学はなぜこのような早い時期に経済科を設置することが出来たのかという疑問がおこるのは当然のことだろう。その答えの一つに、駒井と田尻という当時としては珍しく、アメリカにおいて近代的な経済学を学んできた二人の存在がある。だからこそ専修大学では、創立者展開催に当たってまず駒井、そして田尻を取り上げたのである。

二人の生涯を紹介することは、日本近代における大学史だけでなく経済史、経済学教育史、財政史、さらには官僚史といった分野において十分に意味があると考え、田尻展もそうした観点から田尻の生涯を日本近代史のなかに位置づけることを目的とした。そこで本稿は、田尻展の展示解説として、明治から大正期にかけて大蔵官僚、財政学者、教育者、そして政治家として活躍した田尻稲次郎の事蹟を明らかにし、それがどのような意味を持っていたのかを提示したいと考えている。

本論に入る前に、田尻に関する先行研究に関して一言触れておく。本稿の最後に「田尻稲次郎を知るための主な参考文献」としていくつかの文献を挙げたが、主に田尻の業績については経済史・財政史の分野で取り上げられてきた。日本にフランス財政学を取り入れた人物、または松方財政を支えた人物という評価である。この点については後述する。また近年では明治から大正期にかけての東京

市政を見る際に、市長を務めていた田尻を取り上げ、当該期の市長と議会のあり方を検討する研究も見ることが出来る。

しかし田尻の生涯を知る際に欠かせない文献を一つ挙げるとするならば、彼の弟子ともいべき阪谷芳郎が中心となって結成された「田尻先生伝記及遺稿編纂会」が刊行した『北雷田尻先生伝』（以後、「田尻伝」と略）¹であろう。この伝記が最も詳しく田尻の生涯を述べたものであり、田尻に関する記述の多くはこの伝記を出典としている。

この伝記について簡単に紹介しておこう。「田尻伝」は没後三年目の大正一四年八月に開催された「第四回田尻先生会」の席上において編纂計画が持ち上がり、昭和八年四月の「十年祭」挙行の際に護国寺の墓前に原稿を供え、同年一〇月に刊行された。資料収集・執筆に八年の年月をかけて編纂され、上下巻あわせて約一五〇〇頁におよぶ大著である。

その内容は伝記だけでなく、田尻を知る多くの人物たちからの聞き取り、大蔵省や会計検査院時代の事績の紹介、さらには講演録なども含まれており、まさに基本文献と言ってよい。本稿もこの「田尻伝」に拠ることが多いことを最初に明記しておく。

専修大学大学史資料課では田尻展開催のために、この間数多くの機関において田尻に関する調査を行った。本稿では「田尻伝」に加えて、その際に収集した資料もあわせて使用することで、少しでも多種多様な田尻像を明らかに出来ればと考えている。

また、本号には田尻展開催を記念して行われたシンポジウム「田尻稲次郎の生涯とその功績」の記録も収録している。こちらにも展示の詳細や目的、さらには田尻の生涯はもちろん、彼を取り巻いていた環境などについて、本展示を担当した黎明館学芸課長・徳永氏および専修大学大学史資料課・瀬戸口、そして経済史の観点から専修大学経済学部教授・永江氏が言及しているので、本稿とあわせてご覧いただきたい。

1. 田尻稲次郎の誕生・田尻家のあゆみと稲次郎の知の形成

「田尻伝」によると、田尻家の系図および古文書などは西南戦争の際に灰燼に帰したという²。残念ながらこの言葉通り、今回の調査でも田尻家の歴史に関する一次史料を見出すことは出来なかった。

田尻家の歴史については、これまで「田尻伝」と、田尻塾の還暦寿筵の際に田尻自らが出自を語った談話「田尻子爵自叙伝」³（以後、「談話」と略）という二つの資料を用いて語られてきた。それによると田尻家はもともと古代の中央豪族の一つであった大蔵氏を祖先としている。大蔵氏はその名前の通り大和朝廷が設けた官職の一つである大蔵、つまり財務を世襲職としていた一族であった。後に田尻が財政学者となることを考えると非常に面白い符合と言えるかもしれない。

大蔵氏が九州・太宰府の地に下向したのは平安時代中期のこと

で、瀬戸内海において「天慶の乱（藤原純友の乱）」を起こした藤原純友を追討して功をなした大蔵春実の第三子・田尻又三郎實種が田尻家の遠祖と言われている。「天慶の乱」は日本史上、律令国家の崩壊と地方武士の台頭を象徴する事件と言われているが、田尻家もまたこの事件によって地方武士として誕生することとなったわけである。大蔵氏を祖に持つ家は九州に多く、秋月・原田・三原といった後に名をなす地方豪族の家もそうであった。

その後、筑後三池郡田尻の城主を務めるなど、九州の地において武功を示してきた田尻家が、鳥津家の家臣となった経緯には二つの説がある。「田尻伝」には「徳川氏の初葉に於て、先生の家は何等世に顕はる、ところなし。元禄の頃宇兵衛氏出つるに及び家業を再興し、薩藩の士列に加はるに至れり」⁴とあるように、宇兵衛の代で薩摩藩に仕えることになったとある。

「田尻伝」において、宇兵衛は「田尻家中興の祖」と称され、稲次郎も「談話」において「我家では木像様」と呼んでいたというほど宇兵衛は田尻家にとって重要な人物であったようである。享保五年（一七二〇）七月二〇日に没した宇兵衛は、商才に富み、一代で多くの財をなした。その財によって薩摩藩における中級武家の家格である「小番」を購入し、このとき、初めて田尻家は薩摩藩士になったという。これが一つ目の説である。

もう一つの説は今回の調査において、田尻家のご子孫から見せていただいた資料に基づく説である。その資料によると戦国時代末

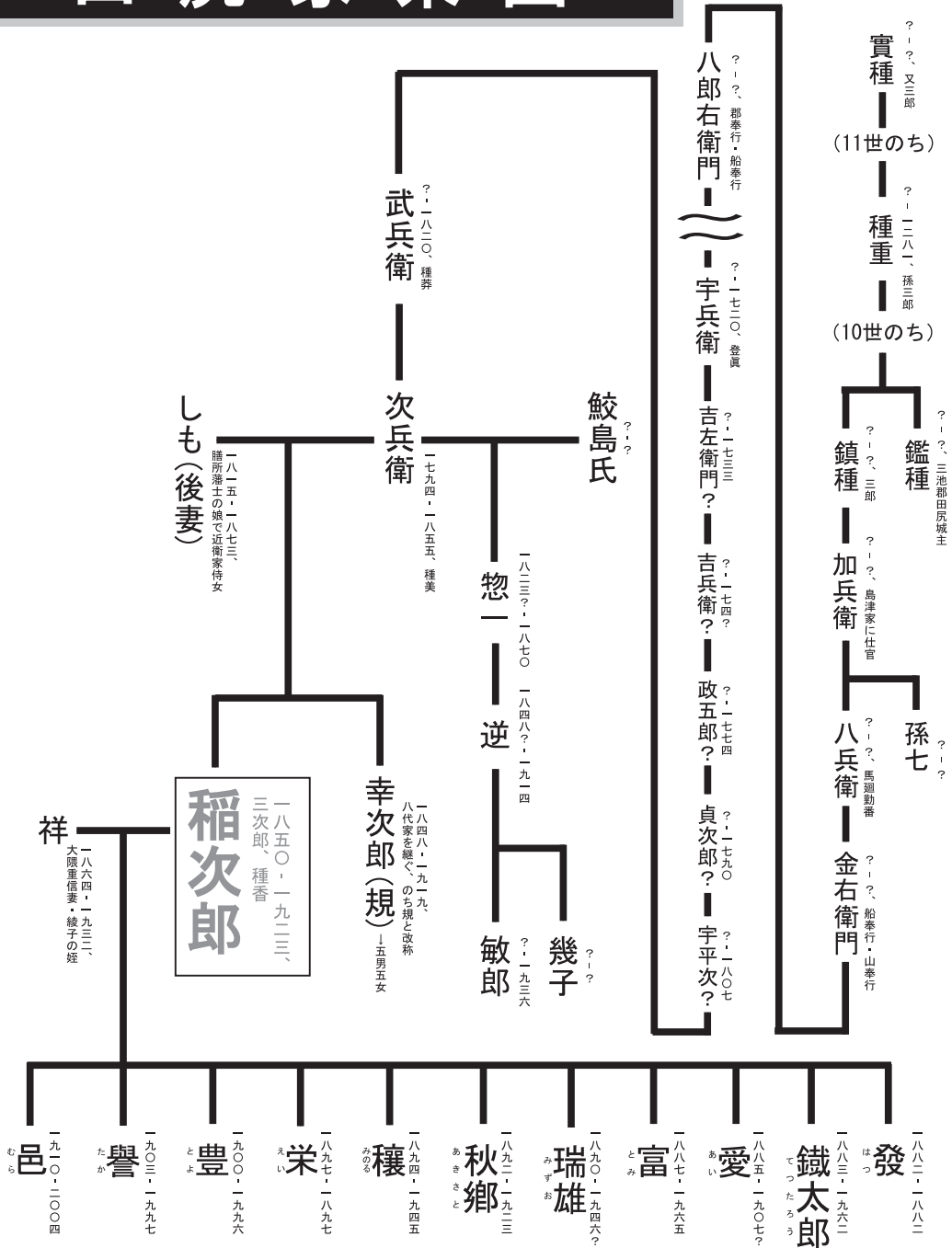
期、田尻加兵衛という人物が鳥津家久（初代薩摩藩主）に仕えたことによって薩摩藩士・田尻家は始まるという。加兵衛は当初、禄高一五〇石で、日置郡伊集院に館を構えていたが、更に一五〇石の加増を機に鹿児島城下へ移った。加兵衛には孫七と八兵衛という二子がいいたが、孫七が病弱なので、八兵衛が家を継ぎ、馬廻り役を務めた。さらにその後、田尻家は山奉行や船奉行を務める人物も輩出したという。

この資料は「田尻先生家系調査書」と題され、「田尻先生伝記及遺稿編纂会原稿用紙」に記されたものである。つまり「田尻伝」の草稿と考えられる。調査者は「鳥津公爵邸・中村徳五郎」とある。中村は明治六年（一八七三）生まれ、東京帝国大学文科大学国史科を卒業後、宮崎県史編纂委員や玉里鳥津家編纂所主任を務めた人物で、当時、鳥津家の歴史に関する第一人者と言ってもよい。

この資料には田尻家の墓の碑文なども収録されており、その記述内容に対する典拠資料を挙げることから、信憑性も高いと思われる。なぜこの説が「田尻伝」に掲載されていないのかは不明であるが、田尻家のルーツを考えるうえで大切な資料と思われるのでこの説を紹介した。今回、展示で使用した田尻家系図は「田尻伝」のほか、この資料の記述も反映して作成したものである。

宇兵衛から数えて六代後の武兵衛、七代後の次兵衛については、田尻による思い出話が残っている。「談話」によると祖父・武兵衛は豪放な性格だったようで、当時は無人島であった小笠原島を征服

田尻家系図



※1. 『北雷田尻先生伝 上巻』『興信録』(第4版～第31版)「しどろもどろ記」(稲次郎三女・星笠富の回想録)などをもとにして作成。
 ※2. 宇兵衛のあと武兵衛までの相続については『北雷田尻先生伝』伝記編纂委員会が没年から推測したもので、詳細は不明である。
 ※3. 名前の右側には生没年および幼名・諱を記した。

するために、兵学の研究と称してあらゆる兵学に関する書物を購入し、自費で三〇〇人もの兵を集めたために家計を逼迫させた。一方、父・次兵衛は武兵衛と反対に用意周到な性格だったようで、幕末の政局混乱のなか、京都留守居役に任命されるなど、藩からも重用された人物であった。また次兵衛も海防に関して一家言持つっており、「海防彙議」と題した書物も編纂したほどであった。

田尻家が薩摩藩においてそれなりの地位を得ていたことは、城下絵図からも知ることが出来る。安政六年（一八五九）頃に作成したとされる「旧薩藩御城下絵図」（鹿児島県立図書館所蔵）を見ると、田尻家の屋敷は御城からほど近い千石馬場（現・鹿児島市東千石町）にあり、その広さも九九九坪とある。それなりの家格であったと考えるとよいだろう。

田尻が誕生したのは、父・次兵衛が京都留守居役を務めていた時期で、嘉永三年（一八五〇）六月二九日、高倉通錦小路（現・中央区東洞院通錦小路下東入北側）にあった薩摩藩邸にて産声をあげた。

初めて鹿児島島の地の踏んだのは五歳のときで、父・次兵衛の急逝により、郷里に戻るようになったためである。この頃、鹿児島城下は騒然としていた。特に文久三年（一八六三）、前年に起こった生麦事件の交渉が決裂したため、市街地はイギリス艦隊によって砲撃を受け、砲火に包まれるなど大きな被害を受けている。

世界最強の軍事力を見せつけられた田尻は、列強に対抗するため

には広く世界を知る必要を感じ、慶応二年（一八六六）、海軍兵志し、薩摩藩が洋式軍事力の強化を図るために創設した開成所の英語科に入学し、英語を学ぶこととなった。田尻の兵学への思いは、祖父・武兵衛、父・次兵衛の意志を受け継いだとも考えられるが、薩英戦争による影響も大きかったと思われる。

当時、開成所は二級生になると長崎、もしくは東京への留学が許可されていたこともあり、田尻は長崎へ留学。さらに江戸へ出て、福沢諭吉が開学したばかりの慶応義塾に入塾する。しかし田尻曰く、義塾の商人的な雰囲気になじめなかったこともあり、幕府の開成学校（現・東京大学）に入学した。しかし海軍兵への夢止みがたく、新政府が開学した海軍兵学寮へ転校するが、入寮者が非常に多かつたため、自分が海軍をやる必要もない、これからは法律を学ぶ必要性があると考え、東京大学の前身である大学南校（開成学校から改名）へと戻った。

この頃、政府は各藩からその石高に応じて一〜三人の秀才を学生として大学南校に入学させる貢進生という制度を設けている。田尻は大学南校在学中に薩摩藩の貢進生に選ばれ、明治四年二月に、アメリカの地を踏むこととなった。

田尻はどのような立場で、また何を学ぶために留学することになったのであろうか。明治三年二月、形部省（司法省の前身）は、田尻を「国法民法課勤学トシテ」アメリカに派遣する旨を通達する。当時の明治政府は優秀な若者を積極的に海外へ留学させる方

針をとっており、田尻の派遣もその一環と言つてよいだろう。この通達からわかるように、当初、田尻は刑部省の一員として法律を学ぶためのアメリカ留学であつた。

まず、田尻はニューヨークの学校に入学するも、この学校では子供扱いされたため、ニュージャージー州ニューブランズウィックにあるラトガース大学グラマースクールに転校する。このグラマースクールは当時、多くの日本人留學生が大学へ進学するために通つた学校であつた。田尻はここで永井荷風の父である永井久一郎や田尻と同じく刑部省から万国公法を学ぶためにアメリカに派遣されていた佐賀藩出身者・大塚綏次郎とともにウイルソンの『万国史』の解説などを行つていた⁷。

そして明治七年、コネテイカット州ハートフォードの高等学校に進学するが、このとき、明治政府は財政難ということもあり、専門学科に進学していない留學生を日本へ返還させる方針を打ち出す。高等学校で学んでいた田尻も帰国対象者となるが、この事態を救つてくれたのが高等学校長のケプロンであつた。彼による学資などの援助によつて田尻はアメリカに残ることが出来たのである。

その後、田尻はイェール大学へと進学する。しかし大学に入つてみると、法律学を志す日本人は多いが、経済学を志す日本人がほとんどいないことに気付いた田尻は、「我が終生の業此所にあり」と経済・財政学を学ぶことを決意する。「談話」から田尻の言葉を借りると次のような経緯であつた。

(前略)「イェール」大学に入つて見ました。処が法律をやる人は日本人中に中々多い、来る者は皆之をやる、鳩山氏杯も其連中だ。そこで又々私は是はいけない、法律をやる人がこんなにも多いなら、何も自分に之をやるに及ばぬ、然るに経済財政は一向やる人がない、依つて我が終生の業此所にありと決意して、経済財政を研究科までやりました。(後略)

このように田尻は大学入学時に経済学・財政学の道に進むことを決め、大学・大学院と足かけ五年に渡り勉学に励んだのである。

ではなぜこの時期、「経済財政は一向やる人がない」状況だったのだろうか。日本において「財政」という考え方や用語が使われ始めたのは江戸時代のことであるが、「財政学」という学問が日本において普及するのは、明治以降のことと言つてよいだろう。

もちろん幕末にはイギリスやフランスで刊行された経済学書が日本にも輸入され、翻訳本も出版されていたが、それは語学者の手によるもので、経済や財政を専門とする者によつて翻訳されたわけはなかつた。さらに幕末から明治一〇年頃まで、欧米において財政は経済学における一つの課題であつて「財政学」という独立した学問体系すらなかつたのである。そういった意味では日本にはまだ経済学・財政学が定着していなかつた時期でもあつた。だからこそ「一向やる人がな」かつたのであろう。

多くの経済学史、財政学史研究が指摘している通り田尻は、日本

に初めて学問としての財政学をもたらした人物であるが、田尻と財政学の出会いはイェール大学時代だったのである。

イェール大学において、田尻に経済学を教えたのは経済学担当の教授・サムナーであった。ヨーロッパに留学経験を持つサムナー教授のもと、田尻は最新の経済・財政学を学んだわけであるが、その成果の一つが、明治一二年六月、駐米公使・吉田清成に提出した「財政意見書」と題した建白書である。その内容は紙幣発行制度の改革、金本位制の導入、租税の改正を政府に対して具申したもので、留学時の田尻の財政に対する考え方を知らることが出来る貴重な文章と言えるだろう。

特にこの意見書で提示した政策の多くは、後年、田尻が大蔵官僚として実際に実行していくことを考えると、田尻の国家財政のビジョンは早くもアメリカ留学時に形成されていたと思われる。

このような意見書を田尻が吉田に提出した背景には、明治一〇年に起こった西南戦争の影響が考えられる。戦費調達のために発行された巨額の不換紙幣が国内にインフレを巻き起こしたことは周知の事実であるが、こういった国内状況は留学生たちの耳にも入っていた。専修大学創立者の一人で田尻と交遊のあった相馬永胤の日記（専修大学所蔵）には西南戦争に関する意見がたびたび出てくる。特に薩摩藩出身の田尻にとっても人ごとではなかったであろう。

経済学者・大内兵衛はこの建白書を「先生の一生の功業のプログラム」と高く評価しており、ここに日本における財政学の発端を

見ることが出来るのである。その意味でも田尻財政学を考える場合、アメリカ留学時代は非常に重要な時期であったと言える。

さらにサムナーが田尻に対して経済・財政学を学ぶ者の必携の書として紹介したのが、フランスの財政学者・ボリユエの手による『Traité de la science des finances』（財政学概論）であった。このボリユエ財政学については田尻財政学を考えるうえで非常に重要な問題なので後で詳しく触れることとする。

2. 専修大学の創立・教育者・田尻稲次郎と「財政学」の構築・

明治一二年（一八七九）、帰国した田尻は、留学時代に知り合った相馬永胤、目賀田種太郎、駒井重格らとともに、当時、福沢諭吉の慶応義塾と並んで隆盛を誇った英学塾・三汊塾内に法律経済科を設け、講義を始める。田尻が日本において行った初めての経済・財政学に関する講義と思われるが、その内容は定かではない。

そして明治一三年九月一六日、専修大学の前身である専修学校の開校式が開催される。京橋区南鍋町（現・中央区銀座）にあった福沢諭吉が出資して設立した簿記講習所がその会場であった。専修大学の第一歩である。先に述べたように専修大学は法律科・経済科を併設し、日本語で専門教育を行う学校として創立された。相馬永胤・田尻稲次郎・目賀田種太郎・駒井重格というともにアメリカで法学や経済学を学び、帰国後、日本に学校をつくらうと誓い合った若者たちを中心に、福沢諭吉や箕作秋坪といった洋学の先達たち、

発足当初の専修学校経済科カリキュラム

		第一学年				第二学年			
		前 期		後 期		前 期		後 期	
科目	講師	科目	講師	科目	講師	科目	講師	科目	講師
歴史	田尻稲次郎	大英商業史	田尻稲次郎	英国商業史	田尻稲次郎	大英商業史	田尻稲次郎	大英商業史	田尻稲次郎
貨幣論	田尻稲次郎	貨幣原論	田尻稲次郎	銀行誌	田尻稲次郎	国債論	田尻稲次郎	国債論	田尻稲次郎
		銀行誌	田尻稲次郎	外国為換	駒井重格				
経済原論	中隈敬蔵	経済原論	中隈敬蔵	予算論	駒井重格	応用経済	中隈敬蔵		
		租税論	田尻稲次郎	経済考徴	駒井重格	租税論	田尻稲次郎		
経済考徴	駒井重格	経済考徴	駒井重格			経済考徴	駒井重格		
経済要論	駒井重格	経済要論	駒井重格			銀行史	田尻稲次郎		
		銀行史	田尻稲次郎						

鳩山和夫や津田純一といったアメリカ留学中の仲間たちなど多くの
人々の協力のもとで設立されたのが専修学校である。これほど多く
の人々が協力したということは、この時期、このような学校の設立
を望む声がいかに大きかったかを物語っている。

専修学校の創立主旨は『専修大学百年史』¹⁰のまとめを借りると
次のようになる。①今や力を専攻に致すべき時代で、専門学校が時
勢の必需であること、②官立の専門学校は、洋語に達し、原書に通
じなければ、入学出来ないこと、③専修学校は、もっぱら邦語を
もって法律経済の学を享受し、官立校に入れない青少年のために、
その目的を達成させようとする事、とある。田尻たちはこのよう

な目的を持って専修学校を設立し、その趣旨に賛同して五一人の若
者たちが入学してきた。

田尻が本格的に経済学の講義を始めたのは、この専修学校におい
てである。このとき、田尻が担当した科目は「歴史」「貨幣論」「国
債論」「銀行史」「租税論」などであるが、専修学校経済科のカリ
キュラムを見てみると、この時期、日本が抱えていた、また後に問
題となる貨幣の統一や中央銀行の設立、税制の確立といった財政課
題に直結する科目を田尻が講義していたことがわかる。発足当時から
田尻を中心とした専修学校経済科の講師陣たちは、実践的な経
済・財政学を生徒たちに教え、その知識を得た人々を増やすこと

で、日本の経済・財政問題を解決しようとしていた意図をこのカリキュラムからも読み取ることが出来るだろう。

このとき、専修学校経済科の授業で、田尻が使用した教科書は、一八世紀末から一九世紀初頭にイギリスで隆盛した古典派経済学者たちの著作の翻訳本、そして専修大学創立と時を同じくして刊行した初めての著作『ポリユー氏財政論』であった。この本は、日本に初めてフランスの財政家・ポリユーを紹介した書物である。

さらに翌明治一四年、田尻は東京大学講師に任ぜられ、大正七年（二九一八）まで教壇に立った。彼が担当した科目は「財政学」「貨幣論」「銀行論」「経済史」「応用財政論」である。ここでも田尻はポリユーの財政学を中心に古典派経済学を講義した。このことは当時数少なかった経済学を教授する両校において、フランス財政学が導入されたことを意味する。田尻が日本の財政学を築いたと言われる所以である。

ポリユーが提唱した財政学とは一言で言えば、自由主義論ということになる。彼もまた古典派経済学者の一人とされているが、国家による必要以上の干渉的な政策に反対し、市場における自由競争を支持する経済理論であった。またフランス財政学の特徴は、租税や公債の経済的分析や財政の歴史的叙述に重きを置いたイギリスやアメリカ財政学と違い、その財政を国家の問題として捉える実用性にあったという。

当時のフランスは、普仏戦争の敗北により「フランス第二帝政」

と呼ばれたナポレオン三世の治世期に終わりを告げ、「第三共和制」と呼ばれる時代に入っていた。政府は戦争による多額の賠償金問題を抱え、財政をどのように処理していくのかに頭を悩ませていたのである。ポリユーをはじめとしたフランス財政学が租税や植民地政策などに言及しているのはそのためであった。

近代国家としてあゆみ始めた日本にとって法の整備、そして財政の確立は急務であった。留学中に「財政意見書」を建白するほど、日本の財政問題を大きな課題と考えていた田尻だからこそ、フランス財政学を日本で普及させようとしたのではないだろうか。

先に田尻は専修大学のみならず東京大学でも授業を行ったと述べたが、そのほかにも数多くの高等教育機関で教鞭を執った。このことはいかに当時、経済学や財政学の講義を行う人材が少なかったかを物語っていると同時に、田尻がこの分野の第一人者であったことを示している。その主な教育歴は次の通りである。

専修学校（現・専修大学） ↓ 明治一三年～大正一二年
東京大学（現・東京大学） ↓ 明治一四年～大正七年
高等商業学校（現・一橋大学） ↓ 明治三一年～大正七年
台湾協会学校（現・拓殖大学） ↓ 明治三四年～大正七年
東京専門学校（現・早稲田大学） ↓ 明治三五年～大正七年

各学校で講義した科目は「経済学」「財政学」「貨幣論」「銀行

論」など様々であるが、四〇年以上も数多くの学校で財政・経済学関係の科目の講義を担当していた。その授業内容は、日本のみならず諸外国の経済・財政に関わる諸問題を具体的な事例を通して論じるというもので、多くの学生たちを魅了したと言われている。田尻はその生涯のほとんどの期間を教育に捧げたと言っても過言ではない。

なかでも東京大学や高等商業学校講師時代の教え子たちのなかには、後に経済学者や大蔵官僚として活躍する人物も多く、その意味でも田尻の経済・財政学は、明治・大正、そして昭和期の学界や大蔵省内に脈々と受け継がれていく。

専修学校の生徒が学生時代の思い出を語る際、必ずと言ってよいほど出てくるのが、田尻稲次郎の名講義の話である。大正・昭和期を代表する著名な経済学者である大内兵衛も、東京帝国大学時代に学んだ教官たちのなかで印象に残る面白い講義をした教官の名前を三人挙げていますが、そのうちの一人が田尻稲次郎であった¹¹。これほどまでに学生たちを引きつけた田尻の講義とは一体どのようなものだったのだろうか。

田尻は数多くの講義録・著作・講演録を残しているが、学生たちに最も印象を残した教科書が『財政と金融』であった。この本は、専修大学創立者の一人・駒井重格が高等商業学校長時代に、田尻に依頼した講義をベースにして書かれた著作である。明治三四年に刊行されて以来、大正七年までに三〇版を重ね、ページ数も当初は四

〇〇頁ほどであったが、三〇版では乾坤あわせて一七四六頁にまで加筆された膨大な著書であった。

晩年の田尻は、この『財政と金融』を一年間で講義するスタイルを取っていた。大蔵官僚として国家財政の様々な施策のなかで重要な役割を果たしていた田尻は、講義にも最新の情報を取り入れて話をした。その結果が、『財政と金融』の毎年の増補・改訂となったのである。つまり毎年変わる統計データなどを取り入れ、それを分析する。そのため頁数が増えていく。学生たちは日本経済の諸問題を具体的な事例を通して論じる田尻の話聞きもらすまいと夢中でノートを取ったと述懐している¹²。

財政学者として単に机上の空論を述べるのではなく、大蔵官僚としての実務をベースにした最新の時事問題や情報を取り入れた講義、これが大勢の学生を魅了する田尻の講義の特徴だったのである。

田尻財政学はこのように高等教育機関で学ぶ学生たちに受け継がれていった。しかし明治期、特に中期以降、現在の東京大学や京都大学をはじめ、多くの高等教育機関で経済学部が創立されるようになると、経済学や財政学を専門とする学者たちが次々と誕生する。そして経済・財政学の潮流は、田尻が導入したフランス財政学ではなく、ドイツ財政学へと移っていく。そしてその流れが戦前まで続く。そのため田尻の存在自体も忘れられていく。現在、田尻の名前を知るものが少ないのはそうした理由もある。

田尻の業績を考えるうえで重要なことは、財政学の導入という先駆者的役割を果たした点だけではない。自らが研究した財政学を常実践する立場に身を置くことによって、研究の質を深め、そしてそれを学生たちに伝えていったことにあるのではないだろうか。

3. 松方正義と田尻稲次郎・近代国家の形成と「財政学」の実践・

田尻の生涯を振り返る際、最も重要な人物の一人に松方正義がいる。これまでの田尻に関する先行研究においても、前述したように田尻の評価は松方正義の「松方財政」を補佐してきた人物というものであった。そこで本展示においても田尻と松方については大きく取り上げた。

松方について簡単に紹介しておく¹³。天保六年（一八三五）、薩摩藩士・松方正恭の四男として鹿児島城下に生まれた松方正義は、明治四年（一八七一）に大蔵権大丞として入省以来、明治三年に第二次山県有朋内閣の大蔵大臣を辞するまで、そのほとんどの期間を大蔵大臣として日本の国家財政を司ってきた人物である。そのほか第四代・第六代の内閣総理大臣を務めるなど明治・大正期を代表する政治家として、松方の存在なしに明治期の財政を考えることは出来ないと言われている。

松方は明治一四年、大蔵卿（後の大蔵大臣）に就任すると、早速増税によって歳入の増加を図る一方、軍事費以外の歳出を徹底的に緊縮する。と同時に、当時過剰に発行されていた不換紙幣の整理・

回収に乗り出し、欧州各国の中央銀行をモデルとした日本銀行を設立することで兌換制度を樹立しようとした。これがいわゆる「松方財政」と呼ばれる政策である。

また明治三〇年には「貨幣法」を制定し、日清戦争によって得た賠償金をもとに金本位制を確立する。これによって貨幣価値の安定と貿易の発展をめざした。そのほか大蔵大臣歴代一位を誇る計一四年七ヶ月という長きに渡る在任期間中には、会計法の整備、所得税の新設、横浜正金銀行をはじめとした銀行条例の制定など、財政・税制・金融関係の法的整備にも努めた。このように数々の財政策を推し進めたのである。

しかし、このような諸政策は松方の力のみで成し遂げられたわけでは当然ない。この松方財政を裏から支えたのが田尻稲次郎を中心とした大蔵官僚たちであった。

明治初期の官僚たちの多くは「藩閥官僚」と言われる戊辰戦争において中心的な役割を果たした藩の出身者であった。その後、明治一〇年代になると、政府による海外留学奨励政策によって欧米に留学した人々が帰国し、各省庁に入省するようになる。そして明治二〇年代になると、東京帝国大学（現・東京大学）出身者が入省を始め、これ以降、官僚の多くは大学出身者となっていく。

明治一三年に入省した田尻は言うまでもなく留学組に属する大蔵官僚であり、彼は帝国大学の講師を兼任していたため、彼の教え子たちが明治二〇年代になると次々と大蔵省に入省してきた。後述す

る阪谷芳郎、添田寿一といった人物たちがそうである。田尻を取り巻く人々の多くは留学組や帝大出身組の人々であり、彼らが明治二〇年代以降、大蔵官僚の主流派として松方正義をはじめ、時の大蔵大臣とともに日本の財政を支えていった。

先にも述べた通り、田尻は大正七年（一九一八）まで帝国大学講師を務める。つまり田尻から財政学を学んだ学生たちが常に大蔵省に入省してくるということである。しかも田尻は入省後六年で局長に、一二年で次官に上り詰めた。次官在任期間は延べ八年半にも及ぶ。この在任期間は歴代の大蔵次官のなかで最も長い。

一方、松方も明治一四年に大蔵卿に就任以降、明治三三年までに延べ一四年半も大蔵大臣を務めた。これも大蔵大臣在任期間としては歴代一位を誇る。このことから明治期の大蔵省を支えていたのは松方と田尻、そして田尻の教え子たちであったことがわかるだろう。

これまで述べたように西南戦争の歳費調達のために不換紙幣を乱発したことによって起こったインフレ状況を改善するために、松方がめざしたのは、不換紙幣の整理、均衡財政、輸出の奨励、そして中央銀行の創設などであった。実はこれらは田尻が「財政意見書」で建白した政策でもあった。つまり松方と田尻は共通する国家財政観を持っていたのである。

では松方と田尻はいつ、どのように出会い、なぜ同じような財政観を持つようになったのであろうか。

田尻が大蔵省に入省したのは帰国後もない明治一三年一月のことであった。このとき、田尻を時の大蔵大臣・大隈重信に推挙したのが慶応義塾時代の恩師・福沢諭吉である。松方正義はこの時期、大隈のもとで大蔵大輔を務めており、これが松方と田尻との付き合いの始まりと思われる。

松方と田尻の関係を考える際に忘れてはならないのが、フランスの経済学者であるルロア・ボリュエの存在である。明治一一年、パリ万国博覧会副総裁として渡仏した松方はフランスの大蔵大臣であり経済学者でもあったレオン・セーと出会い、その薫陶を受ける。後の日本銀行設立にも繋がる中央銀行設立の構想など、セーは多くの助言を松方に与えたと言われている。そのセーの高弟の一人がボリュエであった。松方はセーやボリュエとの交際のなかで、当時最も進んだ経済理論であった古典派財政経済理論を身に付けていったのである。

一方、田尻がボリュエの著作に出会ったのは、イェール大学在学中のことであった。先述したようにサムナー教授より理財学を学ぶ者への必読の書として薦められたのが、明治一〇年に刊行されたボリュエの『*Traité de la science des finances*』（財政学概論）である。田尻が明治一二年、足かけ八年にも及ぶ留学生生活を終え、帰国に際して持ち帰ったのもこの書と言われている。それほど田尻にとって重要な書物であったのだろう。

松方は帰国後、「明治十四年の政変」により下野した大隈に代

わって大蔵大臣となる。これ以降、後に「松方財政」と呼ばれることとなる紙幣整理を中心としたデフレ政策を実施していったのであるが、田尻も、アメリカ時代に経済学を学んだ盟友である駒井重格とともに『ポリユー氏財政論』を刊行する。日本にポリユーの財政学を初めて紹介し、松方のもとで日本の財政を築くべく官僚としての道をあゆみ始めたのである。

このように松方と田尻とともにフランス財政学の薫陶を受けている。つまり共通する財政理論を持ち、政策を立案・遂行していったわけであるが、彼らはフランス財政学的理論をもとにしながらも、その時々日本の状況に応じて臨機応変にその考えを修正しながら財政施策を行った。例えば明治二〇年、世界に先駆けて導入した所得の高い人には高い税率を掛けるという累進所得税などはポリユーが反対していた政策であった。そこに理論だけに縛られることなく、実践を重視した田尻の財政学への考え方を見ることが出来るだろう。

繰り返すが、こういった政策は松方だけで、また松方と田尻だけで遂行出来るわけではない。数多くの大蔵官僚たちの協力がなければ行なうことが出来ないわけであるが、田尻には省内に支えとなる多くの仲間たちがいた。その点について触れることとする。

明治二五年、東京帝国大学を主席で卒業後、田尻の推挙で大蔵省に入省し、後に首相となった若槻礼次郎はその自伝に、当時の大蔵省の採用は大臣ではなく、次官であった田尻にはほとんど任せつきり

であったと書いている。

(前略) 思いがけず、大蔵省の水町袈裟六君が推薦してくれて、大蔵省へ入ることになった。(中略) その時の大蔵大臣は、卒業生の採用などということは、一切田尻次官(稲次郎)に任せて居った。田尻という人は、自分の好き嫌いなと言われない人で、他人がいいと言えば、そんならそうしようという、てん淡な人であった。それで最近に学校を出た者の方が、これが好いと見込んだら、それがいいというわけで、先輩の水町君が進言してくれたのであった。(後略)¹⁴

また後に大蔵大臣、東京市長などを務めた阪谷芳郎も明治一七年、東京帝国大学卒業後に大蔵省に入省するが、これも田尻の推薦によるものであった。

三君御奉職之儀^者、来月十日後ナラテハ相連申間敷、其理由ハ
訣日迄^者生徒ノ資格ヲ脱セサルトノ事ナレハナリ、且ツ三君之
内、貸費生トカ給費生トカノ御方有之ハ、文部省^江他官庁ニ奉
職之儀御願出ニ相成、許可ヲ要スルトノ事ナリ、果テ然ハ学校
ノ庶務課^江御問合セニ相成、夫々順序御運之方可然存候、右^者
万御承知之事ト存候得共、為念一応申上候、頓首

田尻拜

高等文官試験行政科合格者の学歴内訳
(明27～昭22)

	校名	人数	順位
I 帝国大学	東大 (うち法学部) (うち経済学部)	5,969 (5,653) (299)	1
	京大	795	2
	東北大	188	6
	九大	137	10
	京城大	85	11
	台北大	10	
	北大	3	
	小計	7,187	
II 官公立大学・高専	東京商大(高商)	211	5
	東京文理大(高師)	56	12
	東京外語	45	16
	広島文理大(高師)	21	
	神戸商大(高商)	15	
	大阪商大(高商)	12	
	その他の高等商業学校	39	
	その他の官公立高専	50	
小計	449		
III 私立大学	中大	444	3
	日大	306	4
	早大	182	7
	明大	143	9
	法政大	49	14
	関西大	48	15
	立命館大	26	
	慶大	18	
	専修大	13	
	その他の私大	25	
	小計	1,254	
IV その他	通信官吏練習所	173	8
	鉄道省教習所	56	12
	師範学校	45	
	その他	188	
	無学歴	69	
不明	144		
総計	9,565		

- (注) 1. 中退をふくむ。
2. 私立大学は専門部・高師部等をふくむ。

阪谷君、外二君¹⁵

この書簡は、東京帝国大学卒業間際の明治一七年六月一七日に、大蔵省入省を求める阪谷芳郎と外二人(そのうちの一人は添田寿一)に対して田尻が出したものである。三人を入省させるべく、奔走している田尻の様子を知ることが出来るだろう。

当時の各省庁への入省状況を見てみよう。明治期において官僚登用のための試験が開始されたのは明治二十一年のことである。前年に

制定された「文官試験試補及見習規則」に基づく試験であった。これが後に「高等文官試験」に繋がっていくわけであるが、いずれにせよ、明治二十一年以降は試験に合格すれば、出自を問わず高級官僚に登用されることになった。その意味では非常に画期的な試験といえることが言えよう。とはいえその多くは左の表¹⁶にあるようにほとんどが東京大学出身者であった。

ではそれ以前の官僚登用制度はどのようなようになっていたのか。清水氏の言葉を借りると、明治政府の「人材登用は地縁、血縁、人脈に

依拠した情実任用」¹⁷であった。大蔵省の新卒採用も同様であったことは疑いなく、先に若槻は、田尻は採用に対して「自分の好き嫌いなど言わない人で、てん淡な人であった」と述べたが、実際は阪谷に宛てた書簡にあるように、入省までの手続きなども自ら行っていたことがわかる。

また田尻の大蔵省採用人事への影響力は試験制度が開始されても続く。田尻は明治二〇年、「文官試験委員」、同二三年には「文官高等試験委員」、同二四年には「文官普通試験委員長」に任命される。このように田尻は採用試験の問題作成・採点・口述試験の面接にまで携わっていた。まさに田尻が気に入った人間を自身の裁量で採用出来たわけである。

下記の表は試験の首席合格者がどの官庁に採用されたかを示す表である。内務省と大蔵省がトップになっているが、田尻が大蔵省にいた時代は内務省に優秀な人材が流れていることがわかる。だからこそ田尻は大蔵省に優秀な人材を集めようとする採用に気を配っていたのだろう。

明治一〇年代後半から明治二〇年代に大蔵省に入ってきた人々の多くは、田尻の東京帝国大学講師時代の優秀な教え子たちであった。若槻、阪谷のほかにも添田寿一、水町袈裟六、荒井賢太郎など名前を挙げるときりがない。

彼らの多くは入省後、順調に出世して局長・次官といった省内の要職につき、官僚として明治期の財政を支えただけでなく、政治

行政科首席合格者の就職先別
(明27～昭22)

	明治27年 大正6年	大正7年 昭和6年	昭和7年	計
外務省	0	1	0	1
内務省	12	3	2	17
大蔵省	6	3	8	17
農商務省 (農林省)	3	2	1	6
商工省	-	1	2	3
鉄道省	1	1	0	2
司法官	0	1	0	1
帝国大学	2	1	0	3
計	24	13	13	50

家・教育者など幅広い分野で活躍している。つまり、明治中頃から後期にかけて大蔵省は大臣・松方正義をトップとして、その大臣を次官である田尻稲次郎が支え、そして田尻を支える局長・参事官には田尻の教え子たちという状況であった。

明治期の財政を、松方なしでは語ることが出来ないように、松方財政と呼ばれた数々の政策も、このような大蔵官僚たちの存在なしに語ることは出来ないのである。

大蔵官僚たちによる明治期の財務政策の一例として「会計法」の成立過程を紹介しよう。明治三二年、大日本帝国憲法の制定と時期

を同じくして同憲法の附属法「会計法」が施行される。会計法とは国家の収入・支出・契約に関する手続きなどを定めるために、「松方財政」の一環として立憲体制に対応すべく整備された法律であり、この法律によって予算制度は規程されることとなった。

この会計法の草案・制定において重要な役割を果たしたのが当時、主計局調査課長であった阪谷芳郎である。そしてこのとき、阪谷を支えたのが国債局長・田尻稲次郎、田尻の盟友で参事官であった駒井重格、さらに松方の信頼が厚く、後に大蔵大臣にも就任することになる次官・渡辺国武たちであった。まさに「松方財政」を支えた官僚たちによって制定された法案と言える。

田尻が阪谷に宛てた次のような書簡がある。

兼御起草之会計法説明、駒井之修正ヲ経、已ニ第一章丈ハ複写版摺トシ、委員中ニ分配済ニ有之、貴台ニ於テモ定メテ御落手之事ハ存候、然ルニ右説明中御起草之趣ト駒井之修正ハ頗ル異同も有之、且委員中之意見も未タ一定致サス、若シ今日ニ於テ委員中之意見一定致シ置申サス候得共、後日ニ至リ無数之煩ヲ生スルハ必然ニ候間、明日廿五日、委員会合之上、所見一定致度、委員各員ニも右之趣同意ニテ、駒井も出席之積リニ候間、貴台ニも必ス例刻ヨリ御出省被下度、此旨委員総代トシテ小生ヨリ申上候、頓首

田尻稲次郎

廿四日夜認

阪谷芳郎殿¹⁸

この書簡はその内容から明治二〇年のものと思われる。この年の七月、阪谷は「会計原法案」を起草、さらに同年一二月、会計原法案審査委員会は「会計原法案」をまとめている¹⁹。二四日付の書簡を見ると、まず阪谷の草案は駒井の修正を経ていることがわかる。

田尻はその修正案をさらに委員会に諮って問題点を洗い出そうとした。さらに二六日付の書簡も残っているが、大蔵大臣である松方から内閣に対する答弁は駒井と阪谷が担当すべしという下命があったこと、さらに各委員が配付した説明書を熟読しておくことなどが明記されている。このような形で大蔵省全体がこの法案成立に向けて動いていたのである。

阪谷は、大日本帝国議会の重要な職務の一つに国家会計の監督を挙げている。会計法は明治二三年に開設する国会に対応すべく制定された法案でもあった。そのためこの法案では会計検査院の権限を高めることを進言している。阪谷はこのように松方、田尻、駒井らとともに仕事を積み重ねていった結果、大蔵省内での功績が認められ、大臣にまで上り詰めるのである。

財政において予算・会計制度の確立は重要な課題の一つである。松方・田尻、そして田尻の薫陶を受けた大蔵官僚たちにとって、この法案は重要な意味を持っていた。だからこそ彼らはこの法案の制

年次	理財局長	主な参事官(※4)	田原の大蔵省の履歴	松方の大蔵省の履歴																															
明治13年			明治13.1.14 書記局兼議案局勤務	明治8年11.4～明治13.2.28 大蔵大輔																															
明治14年					明治14.2.14 調査局勤務 (議案局兼務)	明治14.10.21～明治18.12.22 大蔵卿																													
明治15年								明治15.4.26 租税局兼務 (※5)																											
明治16年									明治18.12.22～明治21.4.30 第1次伊藤博文内閣の大蔵大臣																										
明治17年												明治19.1.16国債局長心得 (書記局兼務)																							
明治18年													明治19.3.9国債局長																						
明治19年															明治19.4.1主計局兼務																				
明治20年																	明治20.3.28兼務を解かれる																		
明治21年																			明治21.4.30～明治22.12.24																
明治22年																						明治22.11.20銀行局長兼務													
明治23年																							明治22.12.24～明治24.5.6 第1次山県有朋内閣の大蔵大臣												
明治24年																									明治23.6.25銀行局長に専任										
明治25年																											明治24.3.27国債局長心得兼務								
明治26年																													明治24.7.24主税局長						
明治27年																															明治24.5.6～明治25.8.8 第1次松方正義内閣の兼任大蔵大臣				
明治28年																																	明治25.8.10次官		
明治29年																																			明治28.3.17～明治28.8.27 第2次伊藤博文内閣で大蔵大臣
明治30年																																			
明治31年																																			明治31.7.5次官を辞職
明治32年																																			明治31.11.8～明治33.10.19 第2次山県有朋内閣の大蔵大臣
明治33年																																			
明治34年																																			明治33.5.20総務長官
明治35年																																			明治34.6.5会計検査院長
明治36年																																			
明治37年																																			
明治38年																																			
明治39年																																			
明治40年																																			
明治41年																																			
明治42年																																			
明治43年																																			
明治44年																																			

※4.参事官は複数いるため田原に関する人物を中心とした ※5.明治17年5月20日に租税局は關稅局と合併し主税局となる

田尻在職中の大蔵省の主な幹部

年次	卿・大臣	次官・総務長官	主計局長	主税局長	銀行局長	国債局長			
明治13年	明治6年10.12～ 大隈重信 ※2					明治10.1.11～ 郷純造			
明治14年	明治13.2.28～ 佐野常民 ※2					明治13.5.7～ 岩崎小二郎			
明治15年	明治14.10.21～ 松方正義 ※2					明治14.11.16～ 加藤済			
明治16年									
明治17年									
明治18年						明治17.5.20～ 郷純造 (主税官長)			
明治19年						明治19.3.4～ 郷純造	明治19.3.9～ 中村元雄	明治19.3.26～ 中野健明	明治19.1.16～ 田尻禮次郎
明治20年									
明治21年		明治21.11.28～ 渡辺國武		明治21.3.5～ 中村元雄	明治21.10.18～ 藤島正健 明治21.11.20～ 大野直輔				
明治22年					明治22.11.20～ 田尻禮次郎				
明治23年						明治23.6.25～ 矢戸昌			
明治24年			明治24.7.24～ 松尾臣善	明治24.7.24～ 田尻禮次郎	明治24.7.24～ 加藤高明 明治24.8.16 廃止	明治24.7.24～ 有島武			
明治25年	明治25.8.8～ 渡辺國武	明治25.8.10～ 田尻禮次郎		明治25.8.10～ 加藤高明					
明治26年						明治26.5.4～ 曾根静夫			
明治27年				明治27.7.28～ 目賀田禮太郎					
明治28年	明治28.3.17～ 松方正義								
明治29年	明治28.8.27～ 渡辺國武								
明治30年	明治29.9.18～ 松方正義		明治30.4.28～ 飯谷芳郎			明治29.4.8～ 駒井重祐			
明治31年	明治31.1.12～ 井上馨					明治30.4.21 廃止			
明治32年	明治31.6.30～ 松田正久	明治31.7.5～ 藤田壽一							
明治33年	明治31.11.8～ 松方正義	明治31.11.8～ 田尻禮次郎 ※3							
明治34年	明治33.10.19～ 渡辺國武								
明治35年	明治34.5.10～ 西園寺公望								
明治36年	明治34.6.2～ 曾禰荒助	明治34.6.5～ 飯谷芳郎 ※3							
明治37年			明治36.5.8～ 荒井夏太郎						
明治38年				明治37.10.18～ 若槻礼次郎					
明治39年	明治39.1.7～ 飯谷芳郎	明治39.1.8～ 若槻礼次郎		明治39.1.8～ 桜井鉄太郎					
明治40年		明治40.4.13～ 水町親義六	明治40.9.16～ 橋本圭三郎						
明治41年	明治41.1.14～ 松田正久	明治41.6.3～ 桜井鉄太郎							
明治42年	明治41.7.14～ 桂太郎	明治41.7.17～ 若槻礼次郎							
明治43年				明治42.11.5～ 菅原通敬					
明治44年	明治44.8.30～ 山本達雄	明治44.9.6～ 橋本圭三郎	明治44.9.6～ 市来乙彦						

※1『大蔵省百年史 別巻』により作成 ※2明治18年12月22日に大蔵卿は大蔵大臣となる ※3明治33年5月20日～明治36年12月5日の期間は大蔵総務長官

定に尽力したのだろう。

4. 国家の監督機関・会計検査院と田尻稲次郎

田尻の官僚としての業績を見る際、先の大蔵官僚時代ともう一つ重要な時期がある。それが会計検査院長時代である。

会計検査院は明治二年（一八六九）、会計官（現・財務省）の一部局として設けられた「監督司」を前身とし、その後、「検査寮」、「検査局」と名称の変遷を経て、明治一三年に至り、太政官に直属する財政監督機関として誕生した。時の大蔵卿・大隈重信による、検査局が大蔵省の管轄下のままでは財政の監査が十分に出来ないという政府への進言が独立機関となった理由とされている。

そして明治二二年、大日本帝国憲法が発布されるとともに、会計検査院は、憲法上に定められた機関となり、以後六〇年間、天皇に直属する独立の官庁として財政監督を行ってきた。その主な役割は国家の収入や支出、財産などについて、予算や法律規則と違背する点がないかどうか、無駄遣いをしていないかなどを検査することである。

先に述べたように、田尻は大蔵官僚時代から会計検査院の必要性を重要視していた。だからこそ会計法の制定に力を注いだのである。

田尻が大蔵総務長官から会計検査院長に転任したのは明治三四年のことであった。田尻の在任期間は日清戦争の戦後処理、日露戦

争、第一次世界大戦の勃発に直面するという未曾有の国内外状況のなか、膨大な軍事費が計上されるなど、国家財政も大きく揺れ動いていた時期であった。そのため会計検査の重要性が声高に叫ばれる。そのような状況のなか、田尻は検査範囲の拡張、実地検査の充実、書面検査の合理化、さらには職員の地位向上や増員など会計検査院長として様々な院内改革を主導した。

特に戦後の戦費に関わる膨大な決算書の検査は、平時の一般会計の検査作業を平時の人数で行いつつ、同時進行するため非常に時間と労力を要したという。田尻はこの功績により子爵を授けられたが、会計検査院職員も従来、奏任であったのが、勅任または奏任に改正されるなど地位向上が図られることとなった。

そうした田尻の功績を象徴するかのように現在、会計検査院には田尻ゆかりの品が展示されている。それが田尻の胸像である。

大正七年（一九一八）、田尻は後任に席を譲るため、約一七年という長きに渡る院長生活に自ら終止符を打つ。この辞任に際して田尻の業績や人柄を慕う職員たちは当時、東京美術学校（現・東京芸術大学）の教授であり、著名な彫刻家でもあった朝倉文夫に寿像を依頼し、贈呈者の氏名録とともに田尻に贈った。

しかし当初、田尻はこの寿像があまり気に入らなかつたようで、朝倉に対して自分に似ていないと苦情を言う。そこで朝倉はもう一体、胸像を制作して田尻に贈ったのである。この出来栄にはさすがの田尻も自らの生き写しと、朝倉の腕を賞賛する。朝倉自身もこ

の胸像を帝展（現在の日展）に出品したほどで、現在では代表作の一つとされている。

結果として朝倉は二体の田尻像を手掛けたわけであるが、前者は田尻家に、そして後者は会計検査院に飾られることになった²⁰。

残念ながら会計検査院に寄贈された田尻お気に入りの胸像は太平洋戦争時に供出され、石膏像に作り直されることになった。しかし昭和五五年、会計検査院創立一〇〇周年という記念すべき年に、職員OBたちの尽力によって復元され、現在では会計検査院入口の右手にある資料展示室に飾られている。

このように会計検査院職員が退任していく院長に対してお金を出し合って寿像を贈ったのは田尻だけだと言われている。在任期間が長かったこともあるが、田尻が職員の地位や給与などの待遇を引き上げる改革を行ったことが慕われた要因の一つであったのだろう。

もう一つ、田尻がこの時期に積極的に行ったのが講演である。しかも長いときは二、三週間の巡回講演と称し、地方から依頼を受け、全国を廻ったという。

その内容は財政学者として世界や日本の経済についての講演だけでなく、「修身齐家」に関するものも多かったという。修身齐家とは、『大学』を出典とする言葉で、身の行いを正し、円満な家庭を築いてこそ仕事に打ち込めるという意味である。

明治末期から戦争の時代に突入すると、国民教育の一環として「修身」が導入される。そのスローガンとして使われた言葉の一つ

が「修身齐家治国平天下」であった。田尻もその意味では、日本の財政に長く携わってきた学者、そして官僚として国民教育の一役を担っていくことになる。「会計検査院長」という肩書きも講演の際に大きく物を言ったのかも知れない。

いずれにせよ、これ以後、東京市長時代の一、二年を除いて田尻は講演のための全国行脚を行っていく。そしてそのことによってさらに田尻の名前は全国に広がっていくこととなった。

5. 大原幽学と没後の顕彰・田尻稲次郎の思想の源流・

「北雷」。これは田尻稲次郎の号である。「ほくらい」ではなく「きたなり」と読む。この号の由来は田尻が衣服に構わず、いつも同じ服を着ていることから付けられたと言われている。つまり「着たきり」をもじったものである。そのほか田尻は質素を旨とし、食事も粗食であったという。また車を嫌い、常に徒歩で移動する。ダジャレが大好きで、とてもその姿は高級官僚には見えなかったと多くの人々が証言している。

このように田尻は常に自らを律し、官僚として学者として仕事に打ち込んでいたが、その田尻が尊敬していた人物が大原幽学である。

大原幽学の生涯について簡単に述べると、幽学は江戸時代後期の混乱した世相のなか、下総国香取郡長部村（現・千葉県旭市）を中心に房総の各地をはじめ信州（現・長野県）上田などで、農民の教

化と農村改革運動を指導し大きな事績を残した人物である。道徳と経済の調和を基本とした「性学」を説き、農民や医師、商家の経営を実践指導した。

その前半生の経歴については不明な点も多く、代々尾張藩に仕えた大道寺家の次男として誕生したとも伝えられているが、少なくとも天保一三年（一八四二）には長部村に定住したことがわかつている。幽学が本格的に活動を始めたのもこの頃のこと、天保四年頃から独自の実践道徳である性学の教説活動を始め、入門する者も次第に増えていったとされている。

幽学が行った業績として取り上げられるのは、門人たちを指導し農村の復興を図り、現在の農業協同組合とも言える「先祖株組合」をはじめとして農民が協力し合って自活出来るように各種の実践仕事をを行ったことである。植付や収穫時期、肥料の作り方の改善といった農業技術の改善を推し進め、従来よりもはるかに大きな収穫を上げさせることに成功させた。

田尻が大原幽学の教えを知ったのは、会計検査院長時代のことのようにある。「財団法人八石性理学会創立五十周年記念碑」には次のような文章が刻まれている。

幽学先生の遺教を奉し、修身肅家及農業改良の指導奨励と遺跡の永久保守とを目的として同志相議り、明治四十年二月二十七日内務大臣の認可を得て、本会を創立してより、昭和三十二年

は正に五十年に当る、茲に之を記念し、碑を建て、此の間に於ける顕彰行事等を勅し、以て後代に伝へんとす、即ち明治四十四年先生五十年の忌年に当り、初めて頌徳碑を龍ヶ谷に建立す、時の会計検査院長・田尻稻次郎子偶先生の事を知るに及び、頗る之を偉をとし、門生・高木千次郎氏をして幽学全書を編纂せしめ、乙夜の覽に供し、御嘉納の榮を担ふ（後略）

八石性理学会とは、大原幽学の性学活動を引き継ぐために明治四〇年に設立された団体である。この碑文には、明治四四年、幽学没後五〇年に当たり、頌徳碑を建立したところ、当時会計検査院長であった田尻がたまたまこのことを知って感動し、幽学門生の高木千次郎に『幽学全書』を編纂させたと書かれている。

明治後期以降、特に日清・日露戦争によって国内には大きな不安が広がる。国家も多大な軍費調達のため、あらゆるところから税を取り立てようとしていた。この時期、田尻は財政学者として、また国家の財政に携わる者として、こうした状況を打開する方法の一つとして農村振興を声高に訴えていた。だからこそ幽学が唱える「経済と道徳の調和」や、農業経営のあり方や「性学」に深く感動し、彼の業績を世に広めようとしたのだろう。

田尻は幽学の教義を「農事ヲ以テ忠君愛國ノ実ヲ尽スト云フ事」²¹と捉えていた。田尻も幽学と同じように農村を振興することが国を救うと考えており、こういった幽学の教えを広く多くの人々に知っ

てもらったために、遺著を集め、校訂・編纂して明治四四年に刊行した。それが『幽学全書』であった。

田尻はこの刊行に当たって次のような文章を残している。

後進田尻稲次郎勤テ性理学師祖・大原幽学主ノ霊ニ告ク、孔子曰ク徳不孤必有隣ト聖人ノ言吾人ヲ欺カス、曩ニ小子幽学全書ヲ編纂シ、世ニ公ケニシテ、以テ聊カ君力高德ヲ江湖ニ紹介セリ、今哉全書乙夜ノ御覽ニ入ル、何ノ光荣カ之ニ若シ君以テ瞑スヘキナリ

性理学の始祖である大原幽学という偉大な人物の御霊に対して、幽学の後進者を自負する田尻が、自らが編纂・刊行した『幽学全書』を捧げ、その冥福を祈る文章である。田尻は自らを幽学の後進と称している点が興味深い。これは大原幽学記念館に残されたものであるが、演説のための草稿と思われる。明治四四年七月二三日に田尻は八石で講演を行っているが、その際に使用したと考えられる。

このほかにも大原幽学記念館には田尻に関する資料が残されているが、それらはもともと幽学の門生たちの手元にあったもので、それが後に大原幽学記念館に寄贈されたという。門人たちにとって田尻は幽学を世に広めてくれた恩人でもある。そのため彼らが田尻に揮毫をお願いした書などが残ったのだらう。

会計検査院長時代、田尻は全国で講演を行っていたと先に述べた。「修身」をテーマとした講演の際によく取り上げたのが幽学の業績であった。つまり田尻は『幽学全集』という書籍だけでなく、講演によっても幽学の名前を全国に知らしめていったのである。まさに田尻は幽学顕彰に大きな功績を残した人物と言えよう。

6. 晩年の田尻稲次郎・東京市長としての功績

大正六年（一九一七）八月、第五代東京市長・奥田義人が急逝する。しかし、その後任人事には市議や会派の思惑が絡み合い、なかなか決まらずに空席状態が続いた。そこに白羽の矢が立てられたのが、会計検査院長を退き、再び財政学の研究・教育に力を入れようとしていた田尻であった。

その出馬については家族や友人たちの多くが反対したという。というのもこの時期の東京市政は多くの問題を抱えていたからである。しかし田尻は推されて、市長に立候補し、厳しい選挙を勝ち抜き東京市長に就任する。大正七年四月、六七歳のときであった。

とはいえ、各会派から広い支持を取り付けられないまま市長の座についた田尻は非常に厳しい議会運営を強いられる。この時期、東京市会は過半数を持つ会派が存在しないという非常に不安定な政治状況であったことも要因の一つと言えよう。

そういった状況のなか、田尻は就任演説において、上下水道および交通機関の整備、さらには築港の推進など都市整備計画を打ち出

す。さらに全国各地で発生した米騒動が起こった際には米価の原価販売を推進、米の代用食としての豆粕飯の奨励など、東京における騒動を防ぐために手を尽くした。

田尻は明治四五年（一九一二）に「市区改正と市設事業」というタイトルで講演を行っている²²。その内容は市街地をなるべく広くないようにすること、道路や橋、電車線の整備、さらには水路の利用などが必要であるというものである。市長就任のはるか前から田尻が東京市政に対して考えを持っていたことがわかる。

しかし、強固な政治的基盤を持たないまま、市政を行わざるを得なかった状況はいかんともしがたく、東京市政は混乱を極める。その結果、ガス料金値上げをめぐる汚職事件などの責任を取る形で、田尻は市長を辞任することになった。

大内氏によると、田尻の市長時代、東京市を襲った大きな出来事として、まず一つ目に前述した米騒動、二つ目に東京市において発生した初めての電車ストライキ、三つ目に東京ガス会社の料金値上げ強要があるという²³。折からの米価急騰を原因として大正七年七月に富山で起こった米騒動が、東京に飛び火したのは同年八月、また東京ガスが物価高騰に伴い料金値上げを市に申請したのが大正七年十一月のことであった。二つ目の交通事業史上初の東京市電によるストライキは、実際は田尻の市長時代ではない明治四四年二月のことであったが、確かにこの時期は大正デモクラシーに代表されるような変革の時期であり、あらゆる問題が表面化していく時期でも

あった。

田尻市長に対する人々の評価については、当時の新聞を見ても賛否両論ある。学者や官僚としては著名でも、地方行政の経験のない田尻に市長が務まるだろうかという疑問がわくのも当然のことだろう。それほどこの時期の東京市政は難しい状況にあったのである。

特に田尻の豆粕飯奨励については反対意見も多く、日本近代漫画の先駆者とも言われる北沢楽天は「豆粕飯」というタイトルで「豆粕飯は犬も喰はないわ」²⁴と、その政策を皮肉っている。さらに当時の流行歌にも次のように取り上げられている。

・ 高い日本米はおいらにや食えぬ／おいらそんなもの食はずとも
／どんな変なもの食はされたとても、よ／生きておられりやそれだよ

・ 米は上ると下るとまよ／外に南京米が無いぢやなし、よ／何をくよ／鳩豆もござる／腹は痛んでも辛棒する

・ 米が高いとて泣くような奴は／日本男児の面よごし、よ／何をくよ／水飲んでさへも／少しやどうかかうか生きられる

・ 食べる物でさへありや文句云はぬ／どうせ好いた物食へやせず、や／甘いまずいは申さぬときめて／今日も豆の粕、明日も

粕

・ 粕だ、粕、粕、おいら米や食へぬ／食へりや此世が嘘ぢやもの、よ／何はともあれおめでたい御代ぢや／生きておられりや

有りがたい²⁵

これは大正期に流行したと言われる「豆粕ソング」の歌詞である。いかに豆粕飯の評判が悪かったかを知ることが出来るだろう。田尻はもともと玄米食を奨励していた。しかし大正六、七年頃、米や麦の価格が急騰して、豆粕の価格が下落すると、市中を行脚して田尻は豆粕飯を市民に奨励したと言われている。田尻にとっては質素節約のために豆粕を奨励したつもりであったが、人々にとっては強制しているように感じたのかも知れない。逆に言えば漫画や流行歌に取り上げられるほど、当時田尻の豆粕飯奨励策は浸透していたとも言えよう。

晩年の田尻の活動をもう一つ取り上げておく。それが修養団の团长としての活動であった。財政学の普及・啓蒙のために田尻が行った活動の一つに講演活動があった。そして田尻の晩年の講演テーマが農村復興・振興であったことは再三指摘した通りである。幽学を顕彰したのもそのためと考えると良いだろう。

修養団とは明治三九年、日本の社会教育活動の基礎を築いたとされる蓮沼門三が、洪沢栄一・森村市左衛門という二人の著名な実業家から援助を受け創設した社会教育団体である。その目的は青少年の健全なる育成で、田尻は大正六年から亡くなるまで初代団長を務めた。田尻が晩年最も力を入れていた活動であった。

後述するが、田尻は帰国後まもない時期から田尻塾という塾を邸

内に設け、若者の育成に尽力してきた。その意味でも青少年の育成は教育者・田尻にとって財政学の普及とともに重要な課題であったと思われる。当時の修養団顧問であり、実業家として活躍していた森村市左衛門から団長就任を依頼され、これを受諾したのも、修身に関する講演を数多く行ったのも、すべては青少年の育成なしに国家の安定はないという考えがあったからであろう。

修養団は『向上』という、団の活動を広報するために師範学校を中心に全国の学校に配布するための機関誌を発行している。田尻もこの雑誌に多くの文章を寄稿していたが、大正一二年九月号は「田尻团长追悼号」となっている。多くの人々が田尻を悼む文章を寄せているが、このことから田尻が団の活動にいかんにか尽力していたかを物語っている。

7. 田尻稲次郎を取り巻く人々

田尻はその生涯において多くの仕事を成し遂げたが、福沢諭吉、松方正義といった先達たちはもちろん、大蔵省の仲間たちなど多くの人々の助力があったからということはこれまで述べてきた通りである。ここでは田尻を支えた家族や友人たち、また田尻の教え子たちを紹介することとする。

まず田尻の家族について触れると、田尻が結婚したのは明治一四年（一八八一）のことであった。相手は旧幕臣である三枝守富の長女・祥（戸籍名ヨシ）。当時の大蔵書記官・佐伯惟馨の仲介による

もので、田尻三〇歳、祥一六歳のときであった。以後、稲次郎が亡くなるまでの四二年間、稲次郎や子供たち、そして後述する田尻塾生たちを支え続けた。田尻は生前、長男の鐵太郎に、自分が外で気兼ねなく仕事が出来るのは夫人・祥のおかげであると話していたという。

大隈重信の夫人・綾子は三枝家の出身で、守富の妹に当たる。この結婚により田尻と大隈は親戚関係となった。守富自身も内閣印刷局などに勤めた官僚で、田尻の結婚は大蔵官僚同士の繋がりをさらに強めることとなったと言われている。

田尻と夫人・祥の間には男女合わせて一人の子供（うち二人は夭逝）がいた。長男・鐵太郎は銀行家に、四男・穰は海軍兵となった。田尻ももともとは海軍を志望しており、その意味では二人とも田尻の資質を受け継いだと言えよう。

さらに田尻を語る際、松方とともに欠くことの出来ない人物がいる。それが盟友・駒井重格である。駒井と田尻が初めて出会ったのは、二人がアメリカに留学していたときのことであった。ともに経済学という当時の日本人留学生としては珍しい分野の学問を学んでいたからこそ意気投合したのかも知れない。帰国に際して、ボロボロのコートを着て、これまでお世話になった人々に別れの挨拶に行こうとした田尻に対して、自らのコートを差し出したというエピソードも残っているほど、二人は仲が良かった。

嘉永六年（一八五三）、桑名藩士の家に生まれた駒井は、旧藩主

である松平定教に随従してアメリカに留学し、ラトガース大学において経済学を学んだとされている。帰国後は大蔵省に入省し、参事官や国債局長を歴任した後、高等商業学校（現・一橋大学）の校長に就任。現職のまま四八歳という若さで亡くなる。

田尻をよく知る人々は、彼の企画や文書の多くは、駒井の助力によるものであったと口々に言う。語学に堪能であった駒井は、多くの翻訳書を田尻とともに残しており、その才能と協力があつたからこそ、田尻はフランス財政学の導入などの大きな仕事をなし得たとと言えるだろう。特に駒井が翻訳して、田尻が校閲を行った『歳計予算論』は大日本帝国憲法の付属法である「会計法」の起草に当たつて最も多く参照された文献としても有名である。

先に「会計法」制定に際して、田尻を取り巻く大蔵官僚が尽力したと述べた。そのとき、田尻が頼りにしていたのが駒井であったが、それは駒井が『歳計予算論』の翻訳者としての実績があつたからでもあつたのである。

その田尻と駒井の二人と薫陶を大きく受けた人物の一人に、これまでたびたび名前が登場した阪谷芳郎がいる。阪谷は田尻の東京帝国大学講師時代の教え子であり、彼を大蔵省に採用したのも田尻である。しかも田尻は阪谷を大蔵省に入省させると同時に、専修学校に講師としても採用している。いかに阪谷のことを買っていたかがわかるだろう。

阪谷は省内においても順調に出世し、大臣にまで上り詰めたこと

も先に述べた。その後、阪谷は東京市長も務めている。また相馬や田尻と言った専修大学創立者亡き後、二代学長・初代総長として専修大学を支えたのも阪谷であった。その意味では阪谷こそが、研究・教育・実務というすべての面で田尻の後を受け継いだ人物であった。「田尻伝」の編纂に当たって阪谷が中心となったのも当然のことと言えよう。

もう一つ、田尻を取り巻く人々を紹介しておこう。専修大学、東京大学、一橋大学といった高等教育機関において田尻は多くの教え子たちを生んできた。しかし田尻には教育者としてもう一つの顔があった。それが田尻塾長という顔である。

明治二三年、田尻が小石川に居を構えた際に、邸内につくった家塾が田尻塾である。大正六年（一九一七）まで続いたこの塾には計五〇余人ほどが入塾しており、同じ邸内に暮らしていた駒井も塾生を教えたという。

と言っても田尻塾は塾生からお金を取って、カリキュラムを作成して講義を行うような塾ではなかった。基本的には塾生は無料、時には田尻が塾生の学資を提供している。その様子は明治三〇年から四三年まで塾生であった八代準によると「塾には常に書生の五六人が御厄介になつて」いたが、「塾の見廻りに来られた事等は一度もなく、塾には塾頭の様な人も居らず塾則の様なものもなく、全く放任」²⁶状態であったという。

ただし、田尻は食事だけは塾生とともにし、その際に様々な話を

彼らに聞かせた。その内容は財政学や仕事の話、または人生訓のような話であった。その意味では田尻塾は家族のようなものであったとも言えよう。

塾生には松方正義の三男で後に実業家・政治家として活躍する幸次郎や、後に東京大学や一橋大学で教授を務めた経済学者・松崎蔵之助などがおり、田尻はこの塾で多くの後進を育てたのである。

おわりに

本稿では田尻の生涯と財政学がどのように関わっていたのかを中心に論じた。経済学史・財政学史において、田尻が日本に初めてフランス財政学を導入した人物とされてきたことはこれまで述べてきた通りであるが、一体田尻財政学とは何だったのだろうか。その答えとして、田尻は単にアメリカにおいて近代的な財政学を身に付け、深めていっただけでなく、それを高等教育機関の講義や全国での講演を通して世に広め、さらに官僚として、政治家として実践していた。つまり理論よりも実践を重視した学問。そこに田尻財政学の意味があったのではないかということの本稿では長々と述べてきた。

田尻はポリユー財政学を信奉したが、日本の置かれた状況に合わせてその考えを修正する柔軟さも持っていた。日本の財政の健全化のためには農村振興や若者たちの育成が必要と考え、「修身」をテーマとした講演も数多く行なった。その意味では田尻の生涯は

イェール大学に入学してから亡くなるまで財政学の研究・教育・実践とともにあったのである。

明治・大正期において田尻ほど数多くの著作を残した官僚はいないだろう。著作を通じて自らの考えを多くの人々に知ってもらったため、彼は一切、原稿料や印税を受け取らなかったという。自分もらうお金があるならば、その分、本の価格を下げてほしいと願っていたためであった。ここでも田尻の教育に対する強い意志をうかがうことが出来る。こうした考え方が田尻なりの日本における財政学の導入・構築・普及活動だったのである。

最後に田尻稲次郎に関する基本的な参考文献を挙げておく。今後の田尻研究の参考になればと思う。というのも今回、田尻展を開催し、田尻稲次郎と日本における財政学の導入と普及という観点から田尻稲次郎の生涯を紹介した。しかしいまだ田尻稲次郎という人物のすべてを明らかに出来たわけではない。本来であれば官僚や会計検査院長時代の業績をもっと詳しく展示すべきであったが、多くの一般の方々に展示を見ていただきたいという趣旨のもと割愛した部分も多い。本報告でも紙幅の関係上同様に割愛した。

今後は田尻の様々な側面をもっと深く掘り下げていくことが最も重要な課題となるだろう。そのためには教育・経済・歴史に携わる多くの研究者に田尻に着目してもらい、研究を深めていくことが必要である。参考文献はそのために掲げた。

田尻展においては、多くの資料所蔵機関の関係者、さらには田尻

のご子孫など様々な方々にお世話になった。また鹿児島県出身の専修大学卒業生にも多大なるご協力をいただいた。この場を借りて感謝する次第である。

また専修大学では今後も田尻稲次郎に関する調査を続けていく所存である。何か田尻に関する情報をお持ちの方はご連絡いただければ幸いである。

【田尻稲次郎を知るための参考文献】

- ・田尻先生伝記及遺稿編纂会編『北雷田尻先生伝』上下巻
- （田尻先生伝記及遺稿編纂会 一九三三）
- ・専修大学編『専修大学百年史』上下巻（専修大学 一九八一）
- ・専修大学の歴史編集委員会編『専修大学の歴史』
- （平凡社 二〇〇九）
- ・猪谷善一「明治経済学史の一節・忘れられた経済学者田尻稲次郎博士を中心として」
- （『諸学紀要』第一三三号 亜細亜学園編集委員会 一九六五）
- ・大内兵衛「財政学者としての田尻博士」
- （『大内兵衛著作集』第九巻 岩波書店 一九七五）
- ・大淵利男「田尻稲次郎と『フランス財政学』の導入」
- （『政経研究』第二五巻第三号 日本大学政経研究所 一九八八）
- ・金子勝「日本の最初の財政学者・田尻稲次郎」（佐藤進編『日

本の財政学・その先駆者の群像・』ぎょうせい 一九八六)

・車田忠継「東京市・市長と市会の政治関係・田尻市政期における政治構造の転形・」(『日本歴史』六四九号 吉川弘文館)

・小峰保栄「日本最初の財政学者 田尻博士」

(『専修商学論集』第二二号 専修大学学会 一九七六)

・森田右一「田尻稲次郎の財政学」

(『東洋研究』第七七号 大東文化大学東洋研究所 一九八六)

・森田右一「松方財政を支えた田尻・阪谷の業績」

(『東洋研究』第八五号 大東文化大学東洋研究所 一九八八)

ほか

【註】

1 田尻先生伝記及遺稿編纂会編『北雷田尻先生伝』上下巻

(田尻先生伝記及遺稿編纂会 一九三三)

2 「田尻伝」上巻 p4

3 『日本経済新誌 第七巻第一一号』(一九一〇)に所収。後に

「田尻伝」に収録。この談話は明治四三年六月二八日に築地水交社において開催された還暦祝賀会の場での田尻の講演録である。

4 「田尻伝」上巻 p5

5 個人蔵。ご子孫が所蔵しているものは複写物で、現物は所在不明である。

6 国立公文書館所蔵「公文録 明治一三年 官吏進退」に収録され

ている「田尻稲次郎任官ノ儀」には、田尻の生年欄に「明治十二年二月 二十七年四ヶ月」とある。これによると田尻の生年は嘉

永五年(一八五二)となるが、「田尻伝」ほか多くの紳士録でも

田尻の生年を嘉永三年としているため、ここでは嘉永三年とした。

7 田尻と永井の交流については、拙稿「永井久一郎と専修大学創立

者たち」(『専修大学史紀要』第3号 二〇一一)を参照。

8 大内兵衛「財政学者としての田尻博士」(『大内兵衛著作集』第九

巻 岩波書店 一九七五)

9 田尻の帰国時期については諸説あり、定かではない。外務省外交

史料館が所蔵する史料「本官勘合帳 外国官一号」という当時の

出入国記録によると、田尻はパスポートを明治一二年一二月二六日に神戸で返却していることがわかる。

10 『専修大学百年史』上巻(専修大学 一九八一)

11 大内兵衛『経済学五十年』(東京大学出版会 一九六〇)

12 藤田俊一「きたなり先生」の名講義」(『大学シリーズ5 専修

大学』毎日新聞社 一九七二)

13 松方正義に関する先行研究は非常に多く、政治史・経済史など

様々な分野で研究が行われている。こゝでは藤村通『松方正義・

日本財政のバイオニア』(日本経済新聞社 一九六六)、室山義

正『松方正義』(ミネルヴァ書房 二〇〇五)、そのほか大東文化

大学東洋研究所が刊行した『松方正義関係文書』を参考にした。

14 若槻礼次郎『古風庵回顧録』（読売新聞社 一九五〇）

15 阪谷芳郎関係文書299（国立国会図書館所蔵）

16 表「高等文官試験行政科合格者の学歴内訳」および次ページの表

「行政科首席合格者の就職先別」は、秦郁彦「戦前期官僚制余話

（1）・その計量的考察・」（『ファイナンス』第19号 大蔵財

務協会 一九八二）より転載。

17 清水唯一朗「明治日本の官僚リクルーメント・その制度、運用、

実態・」（『法学研究』第八二巻第二号 慶應義塾大学法学研究会

二〇〇九）

18 阪谷芳郎関係文書599（国立国会図書館所蔵）、本文にある二六

日付書簡も同様。

19 長山貴之「明治22年会計法と予算制度」（『香川大学経済学研究紀

要』第四一号 香川大学経済学部 二〇〇二）

20 「田尻氏の銅像一夕話」（『東京朝日新聞』大正一二年八月一六

日）

21 高木千次郎『大原幽学事績』（八石性理学会 一九一〇）

22 「田尻伝」所収

23 大内兵衛「財政学者としての田尻博士」（『大内兵衛著作集』第九

巻 岩波書店 一九七五）

24 『楽天全集 第一巻 明治大正昭和社會漫画集』（アトリエ社

一九三〇）

25 芳賀登「田尻稻次郎と豆粕ソング・米騒動余聞・」（『日本歴史』

七五号 実教出版 一九五四）

26 「田尻伝」上巻 331p

田尻稲次郎 略年表

嘉永3年 (1850)	6月	【0歳】	薩摩藩士・田尻次兵衛の三男として京都に生まれる
安政2年 (1855)	8月	【5歳】	父・次兵衛死去、母および次兄・幸次郎と共に鹿児島へ帰郷
安政6年 (1859)		【9歳】	隣家の野村家へ入門、漢学を学び武士道教育を受ける
慶応2年 (1866)		【16歳】	鹿児島の開成所英語科に入学
慶応3年 (1867)		【17歳】	鹿児島の開成所生徒として長崎に遊学
明治元年 (1868)		【18歳】	鹿児島の開成所生徒として東京に遊学
明治2年 (1869)	2月		慶応義塾に入塾するも退塾、開成所（大学南校）に入学
明治3年 (1870)		【20歳】	開成所を退学し海軍兵学寮に入学
	11月		藩費通学生廃止のため海軍兵学寮を退学、大学南校に復学
明治4年 (1871)		【21歳】	鹿児島藩貢進生としてアメリカに渡航し、ニューヨークの学校に入学、のちラトガース大学グラマースクールに入学
明治5年 (1872)		【22歳】	ハートフォード高等学校に入学
明治6年 (1873)	12月	【23歳】	留学生への官費打ち切りも給費生として在学
明治7年 (1874)	9月	【24歳】	イエール大学に入学
明治11年 (1878)	6月	【27歳】	イエール大学を卒業、引き続き同大学大学院に進学
明治12年 (1879)	8月	【29歳】	アメリカより帰国
明治13年 (1880)	1月		大蔵少書記官に就任
	9月	【30歳】	専修学校を創立し開校式を挙行、自邸内に田尻塾を設立
明治14年 (1881)	4月		大隈重信夫人綾子の姪・三枝祥と結婚
	8月	【31歳】	文部省御用掛を兼務（明治17年10月まで）
明治15年 (1882)	4月		大蔵省租税局を兼務（明治17年5月まで）
明治17年 (1884)	5月	【33歳】	大蔵権大書記官に就任
	10月	【34歳】	東京大学御用掛を兼務（明治20年3月まで）
明治19年 (1886)	1月	【35歳】	大蔵省書記局兼勤および国債局長心得に就任
	3月		大蔵省国債局長に就任
	3月		帝国大学法科大学教授を兼務（明治20年3月まで）
	4月		大蔵省主計局を兼務（明治20年3月まで）
明治21年 (1888)	5月	【37歳】	鳩山和夫らとともに日本で最初の法学博士の学位を授与
	11月	【39歳】	大蔵省銀行局長を兼務
明治23年 (1890)	6月		大蔵省国債局長を免じられ、大蔵省銀行局長に専任
明治24年 (1891)	7月	【41歳】	大蔵省主税局長に就任
	12月		貴族院議員に就任（明治34年6月まで）
明治25年 (1892)	8月	【42歳】	大蔵次官に就任
明治28年 (1895)	10月	【45歳】	男爵を授与
明治31年 (1898)	7月	【48歳】	大蔵次官を退任するも11月に再び大蔵次官に就任
明治33年 (1900)	5月	【49歳】	官制改正により大蔵総務長官に就任
明治34年 (1901)	6月	【50歳】	会計検査院長に就任（親任官待遇、大正5年に親任官）
明治40年 (1907)	9月	【57歳】	子爵を授与
大正4年 (1915)	3月	【64歳】	大原幽学墓前における『幽学全書』天覧奉告祭で講演
大正7年 (1918)	2月	【67歳】	会計検査院長を退任、再び貴族院議員に就任
	4月		東京市長に就任
大正9年 (1920)	11月	【70歳】	汚職事件の責任をとり東京市長を退任
大正11年 (1922)	10月	【72歳】	学制頒布五十年記念祝典に際し教育功労者として表彰
大正12年 (1923)	8月	【73歳】	死去、特旨をもって正二位に叙せられ旭日桐花大綬章を授与